

令和 6 年 6 月 27 日現在

機関番号：42102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K02346

研究課題名(和文)施設から里親への移行支援：里親不調を乗り越えるチーム養育プログラムの開発

研究課題名(英文) Support for foster child transfers from institutions to foster parents:
development of team care program overcoming foster care discordance

研究代表者

安藤 みゆき (Ando, Miyuki)

茨城女子短期大学・その他部局等・教授

研究者番号：90612797

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：里親を対象に「チーム養育」に関するアンケート調査を実施したところ、いつでも繋がることができ、弱さを受け止めてもらえる心理的安全性が担保されているチームを求めていることが示唆された。里親の未委託期のニーズの回答から、未委託期からチーム養育に参加するシステム構築の必要性も見いだされた。里親と里親支援関係者の混合グループで実施した、ノーバディーズ・パーフェクトとリフレクティング・チーム・アプローチの手法を取り入れたチーム養育プログラムの試行では、里親と里親支援関係者は、対等の関係で学び合うことができ、ともに養育する仲間であると感じることができたという報告も得られ、多くの示唆を得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

里親の視点から改めて「チーム」という言葉を問い直し、チーム養育に必要なものは何かを探る試みをした。里親を対象とした調査研究は多くあるが、チーム養育に対する里親のニーズの研究は管見の限りではない。「チーム養育」について、里親はチームの関係性に言及する回答が多かったのに対して、里親関係者のインタビューでは、「連携・相談」など機能に言及する回答が多かった。「チーム養育」といった観点からみれば、「里親不調」というよりも「チーム養育不調」と受け止め、どのようなチーム養育が里親不調を乗り越えることに繋がるのか考察し、チーム養育プログラムを試行したところに、本研究の社会的意義がある。

研究成果の概要(英文)：A questionnaire survey of foster parents on 'team fostering' suggested that they are looking for a team where they can connect at any time and where psychological safety is guaranteed, where they can also accept their vulnerabilities. The replies on the needs of foster parents during the uncommitted period also revealed the need to establish a system for participating in team fostering from the uncommitted period. In a trial of a team fostering programme incorporating the Nobody's Perfect and Reflective Team Approach, foster carers and foster care support workers were able to learn from each other on an equal footing and felt that they were colleagues in fostering together, and many suggestions were made.

研究分野：子ども学および保育学

キーワード：里親不調 チーム養育 フォスタリング機関 心理的安全性 チーム養育不調 里親子支援センター
安心の基地・安全な避難所

1. 研究開始当初の背景

(1) 2016年の児童福祉法の改正では、子どもが権利の主体であることを明確にし、乳児院や児童養護施設などの施設養護よりも里親等の家庭養護優先の理念を規定した。翌2017年に厚生労働省は『新しい社会的養育ビジョン』において、3歳未満の子どもについては概ね5年以内に、それ以外の就学前の子どもについては概ね7年以内に里親委託率75%以上を実現し、学童期以降は概ね10年以内を目途に里親委託率50%以上を実現するという具体的な数値目標を打ち出した。しかし現状は、里親委託率の目標に及ばないだけでなく、里親家庭またはファミリーホームから児童養護施設に措置変更となる子どもは増加傾向にある^{注1}。

(2) 児童養護施設で暮らす子どもたちの65%が被虐待児であり、36.7%に障害がある（厚生労働省、2020；ちなみに2023年の報告では、被虐待児71.7%、障害児42.8%と増加している）。これらの養育困難な子どもを里親に委託するためには、児童相談所やフォスタリング機関などによるチーム養育が不可欠であるにも関わらず、それらが十分に機能していないことが里親委託を困難にしている要因のひとつではないか。そして、その背景には、特定の養育者がいて家庭さえあれば子どもはアタッチメント（愛着）を形成できる、という二者関係重視の考え方が社会の通底にあり、そのようなアタッチメント（愛着）への誤解が、里親制度におけるチーム養育推進の妨げになっているのではないかと考える。

実際に里親家庭では、委託児の被虐待経験や障害等により示す情緒面・行動面の対応に、里親が苦慮し、里親・子ども両方が苦しむ「里親不調」の問題が起きている。里親先進国の欧米では「里親不調」により、子どもがいくつもの里親家庭をたらいまわしにされる「里親ドリフト」が深刻である。黒川（2018）によれば、オーストラリア、カナダ、アメリカの里親ドリフトを経験した子どもは、その過程で人間不信が助長され、措置解除後のホームレス率、軽犯罪率は高く社会適応に深刻な問題を抱えている。これらのことから安定したアタッチメントの形成は、家庭という養育形態において無条件で保障されるものでないことがわかる。

申請者は、2003-2011年の8年間、新設された情緒障害児短期治療施設（現在の児童心理治療施設）でセラピストとして勤務し、被虐待児の破壊的な試し行動、底のない愛情欲求、不安を制御できないことによる問題行動と向き合い、担当した子どもの里親委託も不調に終わった苦い経験も持つ。虐待を受けてきた子どもの養育は、とてもひとりで抱えきれぬものでなく、特定の複数の養育者がアタッチメント対象となるチーム養育が必要であり、それが子どもたちの育ちを守るものであるとの認識が、本研究の動機である。

2. 研究の目的

里親不調の要因となる里親の養育困難感の把握、さらに「チーム養育」という観点から里親のニーズを把握し、里親がどのような「チーム養育」を求めているのかを明らかにし、「里親不調」の危機を乗り越えるためのチーム養育モデルを考察し、プログラムを開発することが本研究の目的である。

「チーム養育」は、『里親及びファミリーホーム養育指針』や『フォスタリング機関（里親養育包括支援機関）及びその業務に関するガイドライン』においても重要なものとして強調されており、里親委託推進の中で多用する言葉である。しかし「チーム」という言葉はBig wordであるので、抽象的でそれぞれの立場で違うイメージを持ち、解釈をしている言葉でもありと思われる。里親と里親支援者（児童相談所、フォスタリング機関、里親支援専門相談員ら）は、「チーム養育」の「チーム」を同じ意味で捉えているのだろうか？「連携」という意味合いだけで、果たして「チーム養育」の本質を捉えることができるのだろうか？

本研究では、里親の視点から改めて「チーム」という言葉を問い直し、チームとは何か、チームに必要なものは何かを探る試みをしたい。なお、里親を対象とした調査研究は多くあるが、「チーム養育」に対して、当事者の里親がどのような思いを抱いているのかを検証した先行研究は、管見の限りではない。

3. 研究の方法

(1) アンケート調査

① アンケート対象者と配布・回収方法

A県の、現在里子を受託中、または過去に受託した里親・養子縁組家庭（148家庭）を対象に、里親支援専門相談員の協力を得て、アンケートを郵送またはウェブにて配布した。調査時期は2021年4月より2021年5月であり、郵送またはウェブにて68件の回答を得た（回収率45.9%）。

② 調査項目と分析方法

調査項目は、里親に関わる情報（年齢、登録している里親種別、里親会の入会状況、里親登録から受託までの期間、現在、過去のそれぞれの受託人数、実子の有無、養育にあたり利用したことがある事業や機関）、里子の特性や養育に関する情報（年齢、性別、障害の有無・種別、被虐待経験の有無・種別、養育困難感の有無、希望する研修テーマ）などであり、そ

れらを選択式で回答を求めた。さらに、実子への対応、地域で養育をサポートしてくれる人、障害のある里子への対応、養育困難を感じる時の状況、未委託期間・委託直後・養育中、それぞれのフェーズごとのサポートニーズ、里親同士のつながりのニーズ、チーム養育の実現のためのニーズ、里親としての喜びなどを自由記述で回答を求めた。自由記述の回答は、内容に基づいてカテゴリ化し、客観性を確保するため5人で分類、確認を進めた。

(2) フォスタリング機関職員、里親支援専門相談員へのインタビュー

里親へのアンケート調査と並行して、複数の県のフォスタリング機関職員、里親支援専門相談員に対して、里親委託推進や「チーム養育」のシステム、里親不調への対応について、インタビュー調査を行い、許可を得て録音し内容を検討した。

(3) チーム養育プログラムの試行

里親と里親支援関係者(里親支援専門相談員・フォスタリング機関職員)の混合グループで、チーム養育を推進するためのプログラムを試行した。プログラムは、ノーバディーズ・パーフェクトとリフレクティング・チーム・アプローチの手法を取り入れ、虐待や発達凸凹などをテーマとしたもので、4回連続講座をそれぞれ2回、別のグループに対して試行した。プログラムは、参加者の許可を得てすべて録音し、終了後に分析した。また、事前事後の質問紙を実施して、その変化について調査した。

4. 研究成果

(1) アンケート調査における研究成果

アンケートの調査結果は、「里親委託推進及びチーム養育に向けたアンケート調査報告書」(52 p.)として作成・製本し、児童相談所、里親支援専門相談員、フォスタリング機関職員などの里親支援関係者に配布した。

以下、里親はどのような「チーム養育」を求めているのか、といった観点から、研究成果を述べる。

① 養育困難感を軽減する「チーム養育」の必要性

アンケート調査によれば、約4割の里子が障害や被虐待経験を有しており、現在受託している里子に、半数以上の里親が養育困難を感じていた。過去に受託した里子に関しては、89%の里親が、関わりにくさや育てにくさを感じていたと回答していた。

どのような時に養育困難を感じるのかを尋ねた記述回答を検討すると、【強いこだわり行動】【強い衝動的行動】【情緒不安】【こだわり・衝動以外の発達障害的傾向】【他害・非行】【実親との関係】らのカテゴリが見いだされた。これらは被虐待児や発達障害児に見られる行動特徴でもあり、【実親との関係】は、社会的養護の子どもたちや支援者が直面する切実な問題でもある。里親の養育スキルの向上だけでなく、チーム養育における支援者側の適切なアドバイスや具体的な支援、医療・療育、教育・保育関係者、実親等とのソーシャルワークの力量が求められていると言えよう。

② 「未委託期」から求められているチーム養育への参加

未委託期のニーズを振り返った自由記述では、【委託の見通しが持てない不安に対するサポート】【(先輩)里親の体験談・里親同士の交流】【子育ての実習体験】【里子の養育に必要な知識】のカテゴリが見いだされた。具体的には、「サロンは未委託だと行きにくかった」、「未委託で知り合いがいず、研修を受けている時に不安感が常にある」、「今から思えばたった1年だが、当時はもうお話は永遠に来ないだろうと感じていた」など、疎外感や不安感が述べられていた。一方で「定期的に乳児院や児童養護施設で実習ができると良い」といった実践も求めている。

未委託期間から里親家庭での家事支援や、研修時の託児など、里親制度の実践的なチームの中に引き入れることにより、里親の疎外感の解消や、養育スキルの向上、さらには里親の特性の把握に繋がり、マッチングにも活かせる可能性があるのではないかと。未委託期間の里親を、いかにチーム養育の中に引き入れるのか、そのシステム構築が求められている。

③ 「マッチング～委託直後の期間」に必要な「詳細な情報共有」と「精神的サポート」

「マッチング～委託直後の期間」のニーズの自由記述では、【委託される子どもに関する情報】と【精神的サポート】のカテゴリが見いだされた。具体的には、「マッチングの時、里子の普段の様子や性格行動など細かく教えて欲しかった。とても良い子ですと言われていたので、だまされた感じを受けた」、「軽度知的障害があることを知らされてなかった、事前に知らせてもらいたかった」、「実親の状況を詳しく教えてほしかった。それにより、初期の対応の仕方が変わったと思う」などや、「委託された時は時間のすべてが里子との時間となり、里母は精神的に追いつめられてしまう時がある、そのサポートも必要」、「今の自分をさらけ出せる場所」、「大変な時のサポート支援をきちんとしてほしい」などである。

委託する子どもや実親の情報をどこまで共有するかについては、児童相談所、フォスタリング機関、里親と、それぞれの立場や経験から、さまざまな考えがあると思うが、これらは

チームの信頼関係に関わる重要な問題である。

また、委託直後の時期は、先に述べた自由記述例からも、里親が最も精神的に大変な時期であることが伺われる。里親委託から施設への措置変更までの期間は1年未満が41.1%と最も多い(伊藤ほか、2021)ことも、それを裏付けている。この時期に、里親が安心して自分をさらけ出すことができるチーム構築が集中的に求められている。

④ 「チーム養育」に必要な心理的安全性

チーム養育実現に向けてのニーズを尋ねた質問に対して、「現状ではチーム養育とは言い難い。情報の共有化、立場の公平化が無い現状においては、チーム制などそれ以前の問題だと思う」、「利害関係のない同等の立場で情報を共有する」といった意見が述べられていた。支援提供者とその利用者との構図を抜け出せず、そこに上下の関係があると、里親支援専門相談員やフォスタリング機関の職員が、「チーム」という言葉を使っても、里親は同じチームのメンバーと言えるのだろうかと思うこともあるだろう。

エドモンドソン(2014)は、チームに所属する人々が、その最大限の力を発揮するためには、チームの中に心理的安全性が必要だと述べている。心理的安全性とは、メンバーがネガティブなプレッシャーを受けずに自分らしくいられる状態である。チーム内の上下関係はチームの心理的安全性に影響を与え、チーム内で地位が低いと感じている人は、ミスや弱みを相談しにくいとも指摘している。

「親はちゃんとした親でなくてはいけなくて良い親を求められている雰囲気があると、自分の弱さをさらけ出すことができず、問題を起こしかねない。親の弱いところをサポートしてもらえると感じられる関係機関であれば、親も自ら協力依頼を求めやすくなるのではないのでしょうか」といった自由記述の回答は、まさにチーム養育における心理的安全性の必要性を示していると思われる。チームの心理的安全性を担保するためにも、対等の関係を意識したチーム養育の構築が課題となる。

⑤ チームに必要な「安心の基地・安全な避難所」

本来、里親制度は、子どもに養育者との安定したアタッチメントをもたらすものとして期待されている。里子が、里親と安定したアタッチメントを形成するためには、里親は里子にとって、アタッチメントの中核である「安心の基地・安全な避難所」(遠藤、2017)として機能する必要がある。しかし養育困難感を尋ねた自由記述の回答では、「(里子が)我が強く、精神的に疲れてしまった」などと委託解除にいたった状況も述べられていた。全国里親委託等推進委員会が2015年に実施した調査^(注4)では、子どもを受託して最も大変だった時期に約3割の里親が、体調不良、睡眠障害、不安症状、鬱症状があったという。里親が里子にとって、安心の基地、安全な避難所として機能するためにも、里親にとっても、安心の基地、安全な避難所が必要であると言える。

2024年4月より、改正児童福祉法に基づき、里親支援センターが児童福祉施設として位置づけられる。アンケートでは、期せずして「里親支援センター」の在り方に対する要望と思われる自由記述の回答が複数あったことは、特筆に値する。「里子が大きくなって、困ったことが起きたとき、そこにいけば、優しく誰からかサポートしてもらえる場所(やはり話しを聞いて欲しいときに、すぐに話しを聞いてもらえる場所)。欲をいえば、里親から自立したのち、1~2泊して、リセットできる場所」、「里親・里子サポートセンター」、「未委託の里親も、委託された里親も、里子も、気軽に رفتり来たりできる場所。子どもの遊び場(外も、室内も)あり、研修や里親会のサロンが、自由に開催できる場所」、「里子同士の交流も、そこで自然とできる場所」、「里親関連の書物も豊富にあり、里子も、里親も、勉強できる場所」などと複数の記述があった。里親だけのセンターではなく、里子も集い会える場所であってほしい、里子を支える場所であってほしい、という切実な里親の願いも感じられる意見であった。

「里親支援センター」が、単なる支援機関の拠点ではなく、いざという時のレスパイト機能も有し、里親子のセーフティーネットとなり、365日、24時間、里親子と共にあり、「チーム養育」の要として機能することを期待する。

⑥ 「里親不調」を「チーム養育不調」と捉える視点の重要性

チーム養育のニーズとして「困った時にすぐつながる」、「いつでもつながる」、「気軽に、些細なことでも相談できる」、「緊急な対応がいつでもとれるシステムを作るべき(夜間や休日に問題は起きるのです)」、「里親・里子が、孤立化しないようにしていく」など、つながりを求める自由記述の回答が多くあり、それだけ里親養育が不安や葛藤、時には孤独感をももたらすものでもあることがうかがわれた。

『フォスタリング機関(里親養育包括支援機関)及びその業務に関するガイドライン』では、里親個人が責任と負担を一身に負うことなく、子どもに対して重層的なケアを提供するためには、里親とフォスタリング機関とがチームを組みながら里親養育を行うことが必要だと述べられている。このことを踏まえると、「里親不調」は「チーム養育不調」と表現するほうが適切であるといえるかもしれない。「里親不調」という言葉には養育の責任全てを里親に負わせるような響きがある。チーム養育、あるいは社会的養育といった理念を念頭

に置くなら、チームとしての養育体制の不調として受け止め、チームとしての養育能力やサポート体制といった点を検討していく視点が、今後ますます重要になってくるのではないか。

(2) チーム養育プログラム試行の成果

里親と里親支援関係者（里親支援専門相談員・フォスタリング機関職員）の混合グループで実施した、ノーバディーズ・パーフェクトとリフレクティング・チーム・アプローチの手法を取り入れた研修プログラムの試行では、参加者とルールを作り、アイスブレイクを用いて、研修が居心地の良い安心して語り合える場所にするように工夫し、里親と里親支援関係者は、対等の関係で学び合うことができ、チーム養育プログラム開発の多くの示唆を得ることができた（中島ら、2022）。

プログラム試行後のアンケートからは、里親と支援者が、知識の伝達だけでなく、一緒につながりを作り出し、ともに養育する仲間であると感じることができたという報告も得られた。今後さらに試行を重ね、チーム養育のアンケート調査において里親が求めている、支援、被支援の枠組みや上下の関係を越えた、共に学びあうチーム養育プログラムを開発していきたいと考える。

注1) こども家庭庁『社会的養育の推進に向けて』の報告から児童養護施設の入退所の状況を見ると、里親またはファミリーホームから児童養護施設に措置変更された児童数は、2016年度106名、2018年度121名、2019年度157名、2021年度173名と増加傾向にあり、2021年度では児童養護施設から里親またはファミリーホームに措置変更された児童数154名を上回った。

注2) 全国里親委託等推進委員会（2016）委託された子どもの情緒と行動の問題に関する調査。厚生労働省。

<引用文献> 雑誌論文、学会発表としてリストしたもの以外

遠藤利彦（2017）第1章 生涯にわたるアタッチメント。北川 恵・工藤晋平編著，アタッチメントに基づく評価と支援。誠信書房，pp. 2-27.

エイミー・C・エドモントソン著，野津智子訳（2014）チームが機能するとはどういうことか。第4章 心理的に安全な場所を作る。英治出版，pp. 150-194.

伊藤嘉余子・野口啓示・石田賀奈子・千賀則史・姜民護・高橋順一・福田公教（2021）里親不調によって児童養護施設に措置変更した子どもの支援ニーズ—児童養護施設を対象としたアンケートからの考察—。日本社会福祉学会第69回秋季大会
<https://www.jssw.jp/conf/69/pdf/A05-04.pdf>

黒川真咲（2018）諸外国における里親制度の実態から考える。浅井春夫・黒田邦夫編著，<施設養護か里親制度か>の対立軸を超えて。明石書店，pp. 61-78

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 安藤みゆき | 4. 巻 第37巻第1号 |
| 2. 論文標題 社会的養護自立支援制度の転換期における課題 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 日本精神衛生学会誌「こころの健康」 | 6. 最初と最後の頁 43-47 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 安藤みゆき | 4. 巻 第24巻第12号 |
| 2. 論文標題 里親養育における地域包括的チーム養育システムの必要性 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 地域ケアリング | 6. 最初と最後の頁 104-108 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 安藤みゆき | 4. 巻 第25巻第1号 |
| 2. 論文標題 施設から里親への移行を支える地域包括的チーム養育システム | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 地域ケアリング | 6. 最初と最後の頁 80-84 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 安藤みゆき | 4. 巻 26 |
| 2. 論文標題 地域で育てる社会的養育への転換：里親制度の課題 | 5. 発行年 2024年 |
| 3. 雑誌名 地域ケアリング | 6. 最初と最後の頁 75 - 79 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|----------------------|
| 1. 著者名 安藤みゆき・細川 梢・平田修三・中島美那子・片根志雄 | 4. 巻 50 |
| 2. 論文標題 里親不調を乗り越えるチーム養育実現への課題ー里親へのアンケート調査の考察から | 5. 発行年 2024年 |
| 3. 雑誌名 茨城女子短期大学紀要 | 6. 最初と最後の頁 1 - 17 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|-------------------------|
| 1. 著者名 中島美那子・田所悠・安保里紗・斎藤明奈・小坂部玲奈 | 4. 巻 18(2) |
| 2. 論文標題 特別支援学校保護者相互支援の交流プログラムの効果ー横だけでなく縦にもつながった5年間の歩み | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 臨床発達心理実践研究 | 6. 最初と最後の頁 101 - 113 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計13件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

| |
|--|
| 1. 発表者名 中島 美那子・安藤 みゆき ・片根 志雄 ・木村 由希 ・神永 直美 |
| 2. 発表標題 チーム養育を推進する研修プログラムの開発 - 里親、里親支援専門相談員が真のチームとなるために - |
| 3. 学会等名 日本子ども虐待防止学会第28回学術集会ふくおか大会 |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 平田修三・菅原温・ト蔵康行・山本智佳央 |
| 2. 発表標題 里親支援センターにおける里親・養子縁組家庭への実実告知・ライフストーリーワーク個別支援の試み |
| 3. 学会等名 日本子ども虐待防止学会第28回学術集会ふくおか大会 |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 山本智佳央・平田修三・田邊哲雄・片山由季・中野紗樹 |
| 2. 発表標題 Re:【2016おおさか】社会的養護を担う人材育成過程においてライフストーリーワークをどう扱うか？ |
| 3. 学会等名 日本子ども虐待防止学会第28回学術集会ふくおか大会 |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|-------------------------|
| 1. 発表者名 安藤みゆき |
| 2. 発表標題 里親のチーム養育の課題 |
| 3. 学会等名 日本保育学会第74回大会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 安藤みゆき・細川梢・片根志雄・中島美那子 |
| 2. 発表標題 里親のチーム養育に対するニーズと課題ー里親アンケート調査からの考察ー |
| 3. 学会等名 日本子ども虐待防止学会第27回学術集会かながわ大会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 木村由希・中島美那子・神永直美 |
| 2. 発表標題 園内研修におけるリフレクティングチームアプローチの可能性. |
| 3. 学会等名 日本保育学会第74回大会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|-------------------------------|
| 1. 発表者名 中島美那子 |
| 2. 発表標題 保護者同士の縦と横のつながり. |
| 3. 学会等名 日本臨床発達心理士会第17回全国大会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|-----------------------------|
| 1. 発表者名 眞崎由香・中島美那子 |
| 2. 発表標題 地域母子保健事業の挑戦 |
| 3. 学会等名 第68回日本小児保健協会学術集会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 遠藤凌佑・金智慧・首藤真由美・宝本小枝子・五井野龍了・平田修三・辻内琢也 |
| 2. 発表標題 福島原発事故後の山形県における避難状況および支援策：当事者・支援者・研究者の語りをもとにした質的分析 |
| 3. 学会等名 第64回日本心身医学会総会ならびに学術講演会 |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 辻内琢也・平田修三・金 智慧・田中 勤・高石啓人 |
| 2. 発表標題 マイノリティ化される現代の若者たちとの対話から学ぶー共生社会医学の提案 |
| 3. 学会等名 第64回日本社会医学会総会 |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|------------------------------------|
| 1. 発表者名 中島美那子・菅野ひろみ |
| 2. 発表標題 大学教員，学生がチームで行う地域包括的発達支援 |
| 3. 学会等名 日本発達支援学会第5回大会 |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 安藤みゆき |
| 2. 発表標題 里親のチーム養育実現のために－「応援ミーティング」のあり方を考える |
| 3. 学会等名 日本保育学会第76回大会 |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 安藤みゆき・片根志雄・細川 梢・平田修三・中島美那子 |
| 2. 発表標題 里親不調による措置変更を防ぐ里親支援とチーム養育の課題：里親へのアンケート調査の考察から |
| 3. 学会等名 日本子ども虐待防止学会第29回学術集会 |
| 4. 発表年 2023年 |

〔図書〕 計2件

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 栗山宣夫・小林徹・細川梢他 | 4. 発行年 2022年 |
| 2. 出版社 建帛社 | 5. 総ページ数 168 |
| 3. 書名 福祉施設実習テキストブック 子ども・利用者理解からはじめる実践 | |

| | |
|--------------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 太田光洋・細川梢他 | 4. 発行年 2022年 |
| 2. 出版社 同文書院 | 5. 総ページ数 240 |
| 3. 書名 子育て支援 - 保育者に求められる新たな専門的実践 - | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

| |
|---|
| 安藤みゆき・片根志雄・細川 梢・平田修三・中島美那子 (2023) 里親委託推進及びチーム養育に向けたアンケート調査報告書, 50p. |
|---|

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|--|-------------------------------------|----|
| 研究分担者 | 平田 修三 (Shuzo Hirata) (50888683) | 仙台青葉学院短期大学・こども学科・准教授 (41309) | |
| 研究分担者 | 中島 美那子 (Nkajima Minako) (60571289) | 茨城キリスト教大学・文学部・教授 (32101) | |
| 研究分担者 | 細川 梢 (Hosokawa Kozue) (00910168) | 福島学院大学・公私立大学の部局等・准教授 (31605) | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|